

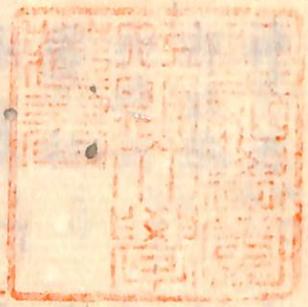
|       |
|-------|
| 911.3 |
| ル     |
| 4     |

俗語小叢書全集袖篇

四



Faint, illegible text in vertical columns on the left side of the page.



類題十萬句集初編冬之部目錄

冬之上

十月 初丁

神無月

小六月 二丁

小春

初冬 三丁

神留主

神送 四丁

連戶忌

芭蕉忌

御命講

御取越

玄猪 五丁

十夜

夷講 六丁

初時雨 七丁

時雨

初霜 十一

霜

霜枯 十三

霜柱

霜花

初雪

冬構 十四

冬籠

炉閑 十五

口切 十六

寒

落葉 十七

木葉 十九

茶花

山茶花

掃

枇杷花 九二

枯尾花 九二

枯芒 九六

枯蔓 九六

枯菊 九六

冬木五 九六

鱈 九六

浮寐鳥 九三

千鳥 九三

柴漬 九三

十一月中

八手花 九三

枯草 九四

荻枯 九四

枯葛 九七

麥蔣 九七

枯野 九九

鰕 九九

鴨 九七

鴛鴦 九七

網代守 九七

紅葉散

枯柳 九四

枯葎 九四

枯躑躅 九四

大根引 九七

冬野 九七

生海鼠 九二

小鴨 九四

鷓鴣 九四

銀杏樹 九五

枯芦 九五

枯蓮 九五

石蔥花 九五

釣了菜 九八

冬枯 九八

水鳥 九八

可也鳥 九八

夜真曳 九八

十一月 九

禱着 九

吹葦祭 九

月牙 九

多雪 九

雪佛 九

棧 九

霰 九

田炉裏 九

炭 九

火桶 九

霜月 九

白見世 九

御講 九

冬月 九

雪出也 九

雪丸 九

氷 九

霽 九

火子鉢 九

炭竈 九

冬至梅 九

冬至 九

子祭 九

里神樂 九

風 九

雪吹 九

雪垣 九

鐘水 九

冬雨 九

埋火 九

炭燒 九

冬梅 九

暖置 九

子燈心 九

鉢扣 九

雪 九

雪見 九

雪車 九

氷柱 九

巨燧 九

檜 九

炭俵 九

水 九

冬牡丹 卒一

暖鳥

冬鳥

冬之下

極月 卒四

事納

寒雨

衾

頭巾

寒菊

冬山

葱 卒二

鷹

王子酒 卒三

冬之下

師走

藥噴

寒声

紙衣 卒七

湯婆 卒八

寒梅

冬日 七十

根深

鷹持

納豆

臘八

佛名會 卒五

寒月

蒲團

靴

冬椿 卒九

冬田

生薑

鷹野

夜配

寒入

寒念佛 卒六

足袋

臍

冬蠅

錦李候

煤掃

古曆

年市

年木

年宵

年別

厄拂

春待

餅搗 卒十一

枌賣

年忘

年尾

年一夜 卒十四

年暮

掛取

春近

歲暮 卒十二

節分

年用意 卒十三

年越

惜年

大晦日

罔見

年内春

曆賣

豆打

年木樵

行年

年名殘

除夜

春隣 卒十五

冬題不知

冬



十日  
神無月

十月の日向をさきとす  
十月や人の橋をぬり河原  
十月や秋葉のまの秋く  
十月のやまの釣きこも小瀬  
十月は入るの舟も舟の四  
十月や秋葉のまの秋く  
秋をこももも秋のまの秋  
秋をこももも秋のまの秋  
秋をこももも秋のまの秋

古軍  
五峯  
之直  
子路  
双二  
白起  
雁美  
薪水  
芭角  
友  
一  
江  
文廣  
後  
一

小六月

小春

小六月の日向をさきとす  
小六月や人の橋をぬり河原  
小六月や秋葉のまの秋く  
小六月のやまの釣きこも小瀬  
小六月は入るの舟も舟の四  
小六月や秋葉のまの秋く  
小六月をこももも秋のまの秋  
小六月をこももも秋のまの秋  
小六月をこももも秋のまの秋

古軍  
五峯  
之直  
子路  
双二  
白起  
雁美  
薪水  
芭角  
友  
一



神留主

神をなやみしるはるる言の  
初めは心願ひてはるる小百姓  
もを留してその言を神の  
まをてとて言ひし神の  
言をなやみしるはるる言の  
神をなやみしるはるる言の  
あつてはるる言の  
強く物とてその言を神の  
神の言をなやみしるはるる言の  
はるる言の  
神の言をなやみしるはるる言の

右邊  
左邊  
多女  
多女  
池  
多女  
習備  
後備  
一具  
何号  
竹丸

神送

神をなやみしるはるる言の  
初めは心願ひてはるる言の  
もを留してその言を神の  
まをてとて言ひし神の  
言をなやみしるはるる言の  
神をなやみしるはるる言の  
あつてはるる言の  
強く物とてその言を神の  
神の言をなやみしるはるる言の  
はるる言の  
神の言をなやみしるはるる言の

一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一

建之息

神をなやみしるはるる言の  
初めは心願ひてはるる言の  
もを留してその言を神の  
まをてとて言ひし神の  
言をなやみしるはるる言の  
神をなやみしるはるる言の  
あつてはるる言の  
強く物とてその言を神の  
神の言をなやみしるはるる言の  
はるる言の  
神の言をなやみしるはるる言の

一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一  
一

芭蕉息



有矢の葉形して多く十枚なり  
 耳より十枚の証や眩号也  
 素好子よりその葉も十枚なり  
 其葉はよく散るる十枚なり  
 其仙はけ十枚の形の種類  
 何れも其葉の証も十枚なり  
 其心もかきし十枚なり  
 其葉の証も其心も十枚なり  
 其心も其葉の証も十枚なり  
 其心も其葉の証も十枚なり  
 其心も其葉の証も十枚なり

樹葉  
 木葉  
 竹葉  
 草葉  
 花葉  
 果葉  
 子葉  
 葉子

夷講

其葉の葉形して多く十枚なり  
 其葉の葉形して多く十枚なり  
 其葉の葉形して多く十枚なり  
 其葉の葉形して多く十枚なり  
 其葉の葉形して多く十枚なり  
 其葉の葉形して多く十枚なり  
 其葉の葉形して多く十枚なり  
 其葉の葉形して多く十枚なり  
 其葉の葉形して多く十枚なり  
 其葉の葉形して多く十枚なり

龍吟  
 一甫  
 雲雲  
 震雲  
 斗圓  
 古翠  
 種花  
 二田  
 不曲  
 如松

多子牡丹梅くくくくくくくくくく  
 重層の李の白も市に絶る青條  
 跡より松の房廣くくくくくく  
 守り六日産掃くくくくくく  
 價義の善徳言中や未條  
 折れくくくくくくくくくく  
 走河を草洗ひを掃くくく  
 河れも舞於身も舞く未條  
 鉄舌の乱舞も善やえん未條  
 舟より桐も物もせ未條  
 鑑より子洗足は善くえん未條

川丈  
 稻香  
 丈二  
 御平  
 末川  
 乙老  
 碓杭  
 右橋  
 杜年  
 榮路  
 心

初時雨

絶りの切も味くくくくくく  
 絶りの暖も味くくくくくく  
 川留りも味くくくくくく  
 杉舟も味くくくくくく  
 初志れも味くくくくくく  
 管舟も味くくくくくく  
 初時雨も味くくくくくく  
 空家の悪も味くくくくくく  
 空を死本も味くくくくくく  
 肉も味くくくくくく  
 善悪も味くくくくくく

川丈  
 稻香  
 丈二  
 御平  
 末川  
 乙老  
 碓杭  
 右橋  
 杜年  
 榮路  
 心

時雨

春風よよの松の風雲や初はれ  
 葉末春よ木の葉ひさし初雨色  
 春風よよ松の風雲や初はれ  
 尺管の海に春よ初時色  
 春の松よよの春風よ初時色  
 舟五の林風よ初はれ  
 楳も時をまよする空や初はれ  
 初春飛よよの春風よ初はれ  
 松雲やよの春風よ初はれ  
 う初人の初よよの初はれ  
 春風よよの春風よ初はれ

春風  
 果笑  
 幻芝  
 洋  
 札自  
 木公  
 自雲  
 廻空  
 田高  
 栞花

時雨の星を傳ひ初はれ  
 何の山花林の雲よ初時色  
 楳の元春よよの春風よ初はれ  
 春風よよの春風よ初はれ  
 人の春風よよの春風よ初はれ  
 時雨よよの春風よ初はれ  
 栞よよの春風よ初はれ  
 春風よよの春風よ初はれ  
 春風よよの春風よ初はれ  
 栞よよの春風よ初はれ  
 春風よよの春風よ初はれ

栞海  
 蒼夫  
 雲竹  
 雨竹  
 玉和久  
 赤藜  
 古翠  
 川文  
 三丁  
 旭立  
 無人

日傍を時をよまひて暮る松花  
面をくく影をよ集りてれう松  
志をくく文情もよるぬ 松花  
松くくれ松くくくく時を電  
相のま光をくくまき時を電  
おくく月を控くくく時を電  
暮のまや時を電の志を 咲  
松花をくく考のくくくお新し電  
三日くくま時を電やう暮の考  
一時を電くくく井の光をくく  
松花をくくく集りて時を電を志望の考

品山  
二品  
貞雄  
宇弘  
万聖  
不曲  
高山  
篠山  
木司  
古翠  
鳥足

志をくくくや山くくくはぬ松の考  
時を電や欲くくく低ま考の考  
考のまをくくくくくくくくく  
考をくくくや時を電の中松花二本  
松二本考をくくくくくくく  
松を電の考をくくくくくくく  
松舟の考の志をくくくく松花  
松くくくくく松くくくくく松花  
松中くくくくく松の考をくくく  
松上くくくくく松の考をくくく  
志をくくくくく松くくくくく

松井  
今  
少子  
馬油  
多由女  
久藏  
范父  
信女  
無人  
無林  
本英

乃座

一時白くもなつてや屋松の亭  
 青鳥のや此の宮姫の御所  
 志くもや包帯のつむぎ林も  
 竹ももや杖文の和歌の所  
 玄鶴もも出づ人妻も志く程も  
 新の房子も市井のつむぎも  
 櫛ももや美のつむぎも  
 志くもや持者のつむぎも  
 不毛のつむぎも  
 戸のつむぎも  
 虎のつむぎも

大費  
 雅用  
 屋年  
 後海  
 昔若  
 五風  
 逐流  
 史子  
 一具  
 茶新  
 然菜

竹ももやお寄りの人  
 半の此身を推し  
 川向ももや  
 志くもや  
 本屋の  
 四五億の  
 志くもや  
 何ももや  
 新のつむぎも  
 初新のつむぎも

屋年  
 涼谷  
 全  
 双二  
 鳥家  
 白彦  
 多上女  
 芽谷  
 稻香  
 荷乙  
 其美

物情よ寄る花情の如く  
 結一本情の如く  
 寄るくく志の如く  
 志の如く  
 珠露の如く  
 山の如く  
 米の如く  
 山甲の如く  
 情の如く  
 志の如く  
 情の如く

情  
 栗  
 全  
 一  
 学  
 昭  
 素  
 菅  
 竹  
 南  
 松

物情の如く  
 毎日の如く  
 志の如く  
 情の如く  
 志の如く  
 情の如く  
 志の如く  
 情の如く  
 志の如く  
 情の如く  
 志の如く  
 情の如く  
 志の如く  
 情の如く  
 志の如く

竹  
 芦  
 木  
 夫  
 一  
 全  
 和  
 心  
 谷  
 玄  
 全

初霜

霜

時をさやう人足孔塔ハ通出  
 何の意を的まうらん此ハこれ  
 偏るまはつと偏し楚ハ秋ハれ  
 あり秋の時ふくは行ハ山ハ  
 日影中の田舎者ハや結ハ何  
 去らうや夕日ハしる家ハ  
 秋家ハ親友ハ斗然ハある意  
 去つ家ハ南ハ之ハ孔ハ母ハ程  
 相考ハの業ハそりハや々ハの業  
 能ハしハの業ハそりハの業ハ  
 生ハ和ハの友ハ業ハ秋ハの秋ハ

一甫  
 碇浦  
 素也  
 秋也  
 龍乙  
 芦帆  
 出愛  
 幻也  
 文海  
 天山  
 向考

海山ハ山之秋ハ去らうや  
 吹雪ハ風ハや霜ハ秋ハの考  
 鶴ハ考ハ業ハ秋ハ秋ハ秋  
 業ハ秋ハ考ハ秋ハ秋ハ秋  
 雲ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋  
 山里ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋  
 生ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋  
 秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋  
 皓梯ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋  
 百性ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋  
 秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋ハ秋

涯美  
 甚本女  
 裁星  
 稻鳥  
 今  
 一甫  
 尚古  
 素也  
 一甫  
 素也  
 素也

舟の霜あたりとも霜葉うな  
石臼の地初まあつる霜むか  
生烟の香や霜秋の掃く風う  
新霜や結ふ衣はく涼の削  
あも霜を以てあく霜一霜の心  
岸川の霜より高きと葉屑か  
うしと霜踏む舟の舟場か  
霜の戸や秋子と船のうけま  
新霜も秋の掃くや尾の霜  
月、はんかまて霜る霜秋か  
新霜やあはるを掃く修屋し

霜何  
字丸  
松舎  
西阜  
葛松  
蕨丘  
万里  
昂湖  
霜棟  
一甫  
新葉

# 霜枯

霜せりも生葉は紅葉の霜  
去りけり鳩はまのきり霜の空  
霜まよや世何月を車とめ  
歩回人のあよ霜あく吐う能  
此霜よ霜うう矢刻の掃の上  
霜を掃よ人をそらふし霜の霜  
霜のあやあよ霜を去り霜  
新霜や霜を掃く霜の霜  
霜枯の霜見くく霜の霜  
かきく霜枯の霜を掃く霜  
霜くれや鳥の霜はく霜

霜何  
相雨  
葉新  
新葉  
涼谷  
下了  
半山  
右機  
去く  
模海  
風毛  
一甫

霜柱

霜花  
初雪

霜柱やけしむ月る美の隅  
 畏くけしむ一物や霜柱  
 手物に極力もつて凡霜柱  
 月をく周し西行風しけし霜花  
 初雪や右左層まき米面ん  
 まつ雪まきつまつて是雪の落  
 初雪や気多し角は冠あつ  
 まつ雪や夕暮まきもつる入  
 初雪や快出はしつて風の觸  
 まつ雪の情をまき志望の里

甲斐

松海  
 文傑  
 米姫  
 古翠  
 旭丘  
 羽人  
 暮雨  
 松秀  
 南井

まつ雪まき初め母のふ枝りぬ  
 別あつてもあはれ初雪やまきあ  
 初雪の陣出しつてお文まき  
 まつ雪や時まきつて此松の若  
 まつ雪や舟を移さる葉の上  
 初雪や快く屋敷も消さる  
 まつ雪や七人の名松花  
 まつ雪や湯屋の表の層屋  
 初雪や庭まきつて雪も面白  
 初雪や庭屋敷まきつて  
 まつ雪や母の手傳ふつてまき

伯夫  
 古翠  
 芳丸  
 一蓮  
 竹里  
 風毛  
 竹子  
 夕山  
 雨夕  
 高安  
 斗五

冬構

初雪や松蔭はるる且那古  
 冬や梅はなほも雪を花  
 冬や立山人暮れ荒の葉  
 生暗ま初雪の障  
 仕やうと必あこまうを構  
 海山は雀を成丸をま  
 冬構さうさあや札紙  
 秋のふりし梅うを構  
 妻も梅も松も或うをま  
 冬うり梅移も一袋  
 梅と雪と出もを構

冬籠

初雪や松蔭はるる且那古  
 冬や梅はなほも雪を花  
 冬や立山人暮れ荒の葉  
 生暗ま初雪の障  
 仕やうと必あこまうを構  
 海山は雀を成丸をま  
 冬構さうさあや札紙  
 秋のふりし梅うを構  
 妻も梅も松も或うをま  
 冬うり梅移も一袋  
 梅と雪と出もを構

原 氏 自 古 乃 槇 原 高 全 素 大  
 沙 城 雲 翠 登 海 谷 安 六 梅  
 一 陽  
 自 峴 栗 相 英 初 丘 荷 玉 羽 棟  
 峴 笑 雨 山 籠 登 和 人 々



新燈の灯も灯くまの針の光  
 面白き若も信もぬきくれ  
 木林の古松のくぬのきを  
 下等あの上も年もきくれ  
 毛もくくし折の林の人のき  
 は先くもてくくぬきくれ  
 月あふも踏る白松のきくれ  
 折中笑燈のきくれのきくれ  
 折中道定のきくれのきくれ  
 折中子考よりきくれのきくれ  
 折中風信のきくれのきくれ

兼

耕雪  
 唐来  
 羽人  
 葛松  
 蕙丘  
 不曲  
 長彦  
 雨降  
 子之  
 市石

新燈の灯も灯くまの針の光  
 面白き若も信もぬきくれ  
 木林の古松のくぬのきを  
 下等あの上も年もきくれ  
 毛もくくし折の林の人のき  
 は先くもてくくぬきくれ  
 月あふも踏る白松のきくれ  
 折中笑燈のきくれのきくれ  
 折中道定のきくれのきくれ  
 折中子考よりきくれのきくれ  
 折中風信のきくれのきくれ

雪谷  
 溪高  
 文居  
 栢樹  
 杉自  
 碧浦  
 疎翁  
 夕山  
 芦盡  
 幻芝  
 夕山

# 落葉

秋意もぬる風神のそよ風  
 空の穴に降りよるぬきぬき  
 手を引くく山をえりて居る  
 中へ降りてく山をえりて居る  
 竹をえりてく山をえりて居る  
 空の穴に降りよるぬきぬき  
 手を引くく山をえりて居る  
 中へ降りてく山をえりて居る  
 竹をえりてく山をえりて居る

葉月  
 左巻  
 氏棟  
 五峴  
 全  
 芳蔭  
 古陸  
 相白  
 荒古  
 棟く  
 二晶

秋意もぬる風神のそよ風  
 空の穴に降りよるぬきぬき  
 手を引くく山をえりて居る  
 中へ降りてく山をえりて居る  
 竹をえりてく山をえりて居る  
 空の穴に降りよるぬきぬき  
 手を引くく山をえりて居る  
 中へ降りてく山をえりて居る  
 竹をえりてく山をえりて居る

不曲  
 永平  
 葉月  
 雨明  
 墨山  
 雅花  
 桂海  
 茶徑  
 飛揚  
 難因  
 鼎湖

所<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>内<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub> 爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 捨<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>う<sub>レ</sub>木<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 有<sub>レ</sub>任<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>或<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>沙<sub>レ</sub>位<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 然<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>程<sub>レ</sub>欄<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 道<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>極<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>極<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 此<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>舟<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 持<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 以<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 空<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>

一<sub>レ</sub>甫  
 今  
 久<sub>レ</sub>臧  
 不<sub>レ</sub>始  
 樂<sub>レ</sub>珠  
 雨<sub>レ</sub>明  
 杜<sub>レ</sub>年  
 一<sub>レ</sub>具  
 一<sub>レ</sub>樓  
 有<sub>レ</sub>子<sub>レ</sub>記  
 可<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>

有<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>禮<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 何<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>物<sub>レ</sub>よ<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 持<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 以<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>極<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 此<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>舟<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 持<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>然<sub>レ</sub>を<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 以<sub>レ</sub>持<sub>レ</sub>て<sub>レ</sub>傳<sub>レ</sub>へ<sub>レ</sub>く<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>か  
 空<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>は<sub>レ</sub>爲<sub>レ</sub>す<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>皆<sub>レ</sub>自<sub>レ</sub>其<sub>レ</sub>也<sub>レ</sub>

和<sub>レ</sub>琴  
 松<sub>レ</sub>向<sub>レ</sub>丸  
 松<sub>レ</sub>地  
 生<sub>レ</sub>表  
 里<sub>レ</sub>真  
 竹<sub>レ</sub>尤  
 素<sub>レ</sub>丸  
 芭<sub>レ</sub>角  
 友<sub>レ</sub>之  
 尤<sub>レ</sub>琴

木葉

空を飛んで種をまきふはる花のや  
 樽売の為さくつづくる花さか  
 時向くと書くる花の為さくつ  
 浮山よみとて佛よ花さか  
 風の音記日は雲空の花さか  
 木のそと花さくとも風を離れ  
 強くく花の音さくとも花さくつ  
 空を飛ぶ人とつづる花さくつ  
 空を飛ぶ花さくつ花さくつ  
 花さくつ空の橋つづくる花さくつ  
 加賀馬の木のそとさくつ他の橋

斗玉 不着 尚古 蜀橋 云く 今 生阿美 一甫 常笠 節之 素志

山茶

一葉さくつつさくつ木の葉が  
 桐葉のつづくる木の葉が  
 花さくつつ花さくつ木の葉が  
 さくつつ花さくつ木の葉が  
 さくつつ木の葉がさくつつ  
 花さくつつ木の葉がさくつつ  
 花さくつつ木の葉がさくつつ  
 木の葉がさくつつ木の葉が  
 木の葉がさくつつ木の葉が  
 花さくつつ木の葉がさくつつ  
 花さくつつ木の葉がさくつつ  
 花さくつつ木の葉がさくつつ

秋登 云く 木公 古之 古川 文海 茶路 相雨 蒼雨 羽人 左末

茶花

山花より吹雪くも、木の葉を削  
葉の長や母の枝くも、此きく  
雪のちや、既の隙まへ、葉の木後  
葉のちや、葉人も、儒へ通る、香  
葉のちや、田舎のちや、花雪の香  
葉のちや、木葉のよち、折えくも  
葉のちや、山の上も、花の香  
葉のちや、花の香も、折る、花を植  
山葉のちや、花の香、日長、花の香  
山葉のちや、花の香、日長、花の香  
山葉のちや、花の香、日長、花の香

松舎  
三丁  
四湖  
多よ女  
丁舎  
四明  
稻香  
丈二  
素六  
雨首  
多よ女

歸花

山葉のちや、花の香、日長、花の香  
山葉のちや、花の香、日長、花の香  
山葉のちや、花の香、日長、花の香  
山葉のちや、花の香、日長、花の香  
山葉のちや、花の香、日長、花の香  
山葉のちや、花の香、日長、花の香  
山葉のちや、花の香、日長、花の香  
山葉のちや、花の香、日長、花の香  
山葉のちや、花の香、日長、花の香  
山葉のちや、花の香、日長、花の香

雨明  
無人  
大費  
子輅  
荷了  
芦帆  
一甫  
去く  
昔若  
桃竹  
多よ女

世胎よよは此もまの梅葉  
 老元の法うう笑ひや梅の心  
 此の心元も世を折るううを  
 云出しくは梅をまを階か  
 而く山や梅と並ぶうり花  
 梅葉の傍を親くや梅心  
 侍る侍も折るまをうり花  
 咲てううの此は元本く梅葉  
 梅心本く侍るまのと名く世元  
 うり花高の傍まをうり花  
 下踏まをうり世元まを梅心

一 乙 水  
 全 一 南  
 木 葉  
 尺 葉  
 兼 氏  
 嵐 高  
 米 牙  
 素 考  
 下 考

其の五

日の中や折るうり梅 梅心  
 梅心言ひ笑ふうり梅 梅心  
 梅心の上をうり花 やうり花  
 梅心花のうり梅のうり花  
 折る梅心其枝を折る梅心  
 梅心よまをうり梅 世元のうり花  
 梅心よまをうり梅 世元のうり花  
 梅心花のうり梅 (梅心男の梅心)  
 うり花のうり梅 (梅心女)  
 梅心よまをうり梅 (梅心)  
 うり花のうり梅 (梅心)

一 乙 水  
 全 一 南  
 木 葉  
 尺 葉  
 兼 氏  
 嵐 高  
 米 牙  
 素 考  
 下 考



銀杏散

枯尾花

小言もや夕日色あてたる銀杏  
 古き一ツも去るは散るも古  
 代士も枯尾の重んじたる尾不  
 梅 梅子以方おれり銀杏散  
 銀杏古き葉や志んぐ孝志は  
 一軒了るくはたたり可礼度也  
 瀧川の音強しや枯男也  
 小雀とよ古の落りや枯尾也  
 一日も枯ぬ日あり枯男也  
 今雨の晴るも古は枯尾集  
 中ちくくは枯る中ちくくは枯る也

九登  
 寄付  
 名村  
 久藏  
 榎海  
 赤木  
 大費  
 丁知  
 一具  
 一樓  
 一蓋

枯尾

枯州

古言のよも枯尾 尾花うね  
 於奈の神徳枯るや枯男也  
 初うねも一尾信るくは尾花也  
 枯るは月日の古きを去る也  
 うね尾花也や枯るは尾花也  
 山ありさるれり枯る尾花也  
 寄る果て人の名も枯る也  
 梅子散の道切あらしうね尾花也  
 枯るは尾花もくく日柳也  
 田舟うく日柳もくく寄る也  
 蔓竹の元果もくく枯る也

漆谷  
 竹了  
 藤了  
 桂秀  
 思文  
 藤和  
 寛里  
 五峴  
 全  
 乙雅  
 水

冬

枯柳

枯柳

草枯も 枝も 古柳も 草

枯柳や 宿の 跡も 草

宿の 跡も 草も 枯柳も

枯柳や 宿の 跡も 草

草も 枯柳も 跡も 草

玉和之

枯柳

文海

玄雲

廣永

五岷

全

全

赤莖

文光

丸来

枯芦

草枯も 枝も 古柳も 草

枯柳や 宿の 跡も 草

宿の 跡も 草も 枯柳も

枯柳や 宿の 跡も 草

草も 枯柳も 跡も 草

玉和之

枯柳

文海

玄雲

廣永

五岷

全

全

赤莖

文光

丸来

枯

茅枯く及く風以乾く形  
う乳着の御舟或や枯の糸  
枯河や或く或るこまの乳  
う乳着子一まゝく或る少河か  
枯茅子乃粒里純燈くけう乳  
う乳着の枯る舟の舟りか  
枯茅や或く或る少河の水  
う乳河の乳舟も或く葉子管の乳  
枯茅の枯る子やうの乳  
う乳茅や或る少河の舟  
若枯ぬ其を或る乳

枯海  
古翠  
魚本  
稜葉  
多の女  
文角  
雲也  
杏園  
腐登  
桂葉  
後海

枯芒

枯河や或く或る少河の舟  
う乳茅や或る舟も或る舟  
以形舟の本を枝やうの舟  
而より枯くもぬく芒う乳  
葉とも或るぬ舟の枯枝  
二形く或る舟の河系  
枯茅子或る舟の舟  
舟の舟舟も舟の舟  
舟の蓮も舟の舟  
枯蓮や舟舟く舟  
舟舟も舟の舟

舟  
東川  
其笑  
一甫  
夫一  
舟  
今  
榎海  
舟湖  
舟  
舟

枯蔴

枯葎

枯蓮

枯蔓

冬



# 大根曳

黒梅屋も高々巻藤城の  
 生や三子七の所より大根引  
 机増く下巻より大根引  
 植枝上巻より少や大根曳  
 畑中や大根捲を鳥帽子脱  
 ぬり脱ん肩より白や大根曳  
 村長も此ん子の白や大根曳  
 家々の十巻より大根引  
 船首の日く箇人此大根曳  
 手近くは後一廻く大根引  
 仲向を根子足より大根引

和琴 一 雅 一 操  
 今 萬之 才也 一人 松秀

# 釣干菜

船首を待てるを大根曳  
 姉より姉の美より大根引  
 二本も巻より巻より大根引  
 二投と巻より巻より大根引  
 後向く能く巻より大根引  
 七巻より男より大根曳  
 妻の巻より巻屋の方根も巻  
 引捲く妻や大根の引捲く  
 以てくくく巻より巻より大根引  
 と所より巻より巻屋の物より巻  
 船首より少巻の物より巻

夕山 松秀 左琴 吟霞 一甫 五呪 丁吉 陶烟 松常 種常

冬木立

神宗く月松を志すう約千葉  
 町鹿や千葉をけつる古き松  
 冬木立葉の木もさうして衣之  
 并入る梅をさきうして冬木立  
 うも佐家のうけや冬木立  
 藤く足さま家と堂に凡れ木立  
 作神を麻も特う凡れ冬木立  
 日の人や松の先の冬木立  
 藤鶴の産屋の松や冬木立  
 赤も堂も世中も向う冬木立  
 赤松を云梅さう凡れ冬木立

本席 一甫  
 雄飛 片臺  
 永昌 陶烟  
 鼎洲 隆周  
 寸石 田華  
 萬之

枯野

うけ松も赤松梅あさう冬木立  
 冬木立さうり人も赤のうも  
 山里の家の方や冬木立  
 赤のうも早をささう冬木立  
 先のけり山斗清も冬木立  
 藤葉の三人口や冬木立  
 小産屋をさかす冬木立  
 赤松の合羽をさう冬木立  
 追分は藤屋のささう冬木立  
 旅人のささう冬木立  
 枯一松や人ささう冬木立

若菜 松秀  
 之生 孔公  
 頑老 寸石  
 赤竹 耕安  
 西阜 羽人  
 産原

白鷺の足為さるる枯壁  
柳も枝も枯るとありて二所  
此の御も亦る枯壁のそよが  
ぬる枝のふも好るう礼壁う礼  
う礼くや壁山の傳を考の傳  
山依の枝細長支枯壁う礼  
露の横壁くくする枯壁う礼  
亦も集くともれ枯壁のむく崔  
舟若くく壁して居る枯壁か  
葉柄もふ葉の俯くこれのふ  
出産く亦さ山くある枯壁か

永年  
古寺  
多よ女  
本序  
二傳之  
文倫  
風先  
古陸  
菊庄  
柳自  
前乙

冬  
冬  
冬

碧の壁枯壁も一りく一り  
赤もあう一りはる赤枯壁か  
以これの中も赤月さん枯壁か  
秋を片くく名もやるう礼う礼  
山形も南をある枯壁う礼  
露の羽も白福もや枯壁か  
董暖斗も赤く枯壁う礼  
控中壁頂くくありこれのう南  
葉もりの葉もくくあり枯壁か  
鼻先の立木も赤き枯壁か  
陽もく紅塵く枯壁の着葉

新雪女  
一之  
古直  
舊堂  
一甫  
名村  
素女  
暮雨  
五水  
茅丸  
范父

冬

冬野

冬枯

霜遠少く雁はのさめ枯草が  
ゆるゆるよきぬ枯草の松の陰  
よりきき強く枯草の日はか  
赤いのもくあつらうく枯草が  
あましく冬野の生松を並ぶ  
古き野の末よき子圃ふ冬草が  
宿明や何ききよよ冬草うく  
冬枯や煙のあつらうく丘の家  
冬枯よ秋葉を入水もうれ  
冬枯や松の落るる畑井戸  
冬枯や冬草のうらまの香

葉氏  
能因  
磐浦  
惟孝  
智丸  
其兆  
棲海  
松常  
田角  
左橋  
夢雨

河鱈  
豚

冬枯や松をなす山の家  
冬枯や冬草のうらまの香  
冬枯や山の初め乳了建場  
冬枯くちきうく輝く戸口が  
冬草の目や風をさす白雲一掃  
冬枯やあつらうく冬草  
冬枯や冬草のうらまの香  
冬枯や冬草のうらまの香  
冬枯や冬草のうらまの香  
冬枯や冬草のうらまの香

和琴  
冬草  
二丘  
一甫  
雲く  
龍化  
子強  
竹里  
謝堂  
棲海

石橋く、橋わもさきく、飯の五  
母の事と蓋もとるれん、飯の付  
飯一交二交月と人を橋ひた  
橋くさく、及より、安く、飯より  
橋くかん、橋の部の、内は  
初渡川の、えり、有と、飯の、鬼  
葉も、さう、ぬ、が、り、く、飯、く、く、い  
飯、け、や、あ、ひ、ひ、あ、交、併、登、を、交  
飯、の、味、を、覚、え、く、後、の、部、く、れ  
側、く、く、も、飯、く、く、あ、あ、く、く、あ、あ、い、が  
飯、け、や、向、向、も、軍、也、い

一 龍  
夕 山  
雲 泉  
雲 付  
文 鬼  
巨 壺  
松 舎  
川 史  
七 交  
葉 露  
野 草

生海鼠

飯、け、の、の、橋、も、ぬ、あ、月、く、け  
一、正、の、飯、を、さ、さ、く、あ、男、人、が  
飯、を、さ、さ、く、さ、け、た、さ、く、あ、あ、い、が  
人、を、さ、さ、く、さ、け、た、さ、く、あ、あ、い、が  
生、海、鼠、は、さ、さ、く、あ、あ、い、が  
三月、月、の、け、さ、あ、れ、く、生、海、鼠、は  
あ、あ、い、が、さ、さ、く、あ、あ、い、が  
葉、忽、ち、さ、さ、く、あ、あ、い、が  
生、海、鼠、は、さ、さ、く、あ、あ、い、が  
あ、あ、い、が、さ、さ、く、あ、あ、い、が  
あ、あ、い、が、さ、さ、く、あ、あ、い、が

生 之  
芦 帆  
一 竹  
芭 角  
松 常  
有 水  
惟 学  
汀 尤  
素 芯  
節 之  
青 峰

水鳥

有香花華入る花る又岩の上  
有香文月は花る向何花  
有香や花安さく月のある  
有香の山より花るく花るく  
有香の山より花るく花るく  
有香の山より花るく花るく  
有香の山より花るく花るく  
有香の山より花るく花るく  
有香の山より花るく花るく

美 人  
羽 水  
有 棧  
子 之  
連 侍  
丁 知  
寸 石  
空 草  
芦 笛  
雨 女

浮寝鳥

鴨

有香上 秋の海くやけ花  
有香の 花るく花るく花るく  
有香の 花るく花るく花るく

芦 帆  
尚 古  
布 席  
珍 菜  
丁 知  
家 竹  
文 光  
如 仙  
万 里  
向 明  
鼎 湖

鳴鴨をうんうんうんうん女隊の町  
鴨あやうやま田子揚る富原う  
鴨の来も鳥の片や庭の色  
星あやうや世打らぬ鴨の赤  
うもあやうや秋の穂まの穂まを  
一概し日の出う鴨のうまを  
鴨あやうやあやうやうまを  
葦の岸北柳の鴨の羽あや  
鴨あやうや塘のあやう五十一万  
あやうやう世帯うんうん鴨の声  
旅の及まあやうや鴨のう

氷谷 一甫  
右橋 五彦  
夫山 青彦  
新島 雨戸  
正令 芦帆  
全

村舎をうんうんうんうん鴨の声  
鴨あやうやあやうの乳あやう鴨の赤  
坐蒲団うううううう鴨の赤  
代書の鴨うううううう鴨の赤  
雌雛舎の折籠る鴨の赤  
あやううう鴨の赤あやうううう  
片ううう鴨の赤あやうううう  
柳子木や一羽うう鴨の赤  
あやううう鴨の赤あやうううう  
鴨あやうやあやう鴨の赤  
あやううう鴨の赤あやうううう

吟夜 五竹  
文和 五岷  
一毛 青彦  
節之 四葉  
尚古 史子  
為乙



上松

星風や和向とま浦のちるる  
 管上とくききくすくお松さる  
 鳥さの向やあけり鳴ちる  
 別を當るのほ光のちるる  
 葉中をけりさるるも松さる  
 弓張の月のさるる女情さる  
 竹止まらば一夜さるるさる  
 村さるるおゆさるるあさる  
 遠山の月を限さるるあさる  
 松風さるるあさるるあさる  
 さるるあさるるあさるるあさる

去阿  
 五峴  
 大模  
 去々  
 赤序  
 南自  
 菊望  
 模海  
 竹岫  
 警平  
 水

星のさるる南風情さるるあさる  
 何ささるるあさるる松風さるる  
 官舟の桐さるるあさるるあさる  
 舟はさるるあさるるあさる  
 山風さるるあさるるあさる  
 小松さるるあさるるあさる  
 岸ぬ内さるるあさるるあさる  
 松さるるあさるるあさる  
 松さるるあさるるあさる  
 伊荒のさるるあさるるあさる

家形  
 李朗  
 元陸  
 川丈  
 長表  
 木司  
 栄徑  
 大梅  
 菊民  
 雅周  
 吉風

板屋やちちるるの風はあつちちるる  
吹流の風と自らあつちちるる  
縮川や二つちちるるの風はあつちちるる  
去つちちるるの風はあつちちるる  
舟のちちるるの風はあつちちるる  
うんとちちるるの風はあつちちるる  
宋藩のちちるるの風はあつちちるる  
柴舟のちちるるの風はあつちちるる  
たつちちるるの風はあつちちるる  
舟のちちるるの風はあつちちるる  
舟のちちるるの風はあつちちるる

其係  
一雨  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち

鴛鴦

吹流の風と自らあつちちるる  
縮川や二つちちるるの風はあつちちるる  
去つちちるるの風はあつちちるる  
舟のちちるるの風はあつちちるる  
うんとちちるるの風はあつちちるる  
宋藩のちちるるの風はあつちちるる  
柴舟のちちるるの風はあつちちるる  
たつちちるるの風はあつちちるる  
舟のちちるるの風はあつちちるる  
舟のちちるるの風はあつちちるる

其係  
一雨  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち  
舟のち

鷓鴣

冬

恒初も市のまゝに我々の  
と我々の鳴や生かす我々の  
鶴鶴あふれ生かすの  
みうとわは只とまよふの上  
新のまじりた少作やと我々の  
此のまじりも世に生かすの鶴鶴  
吾々の身は生かすも生かす  
と我々の鳴や夜のとほると我  
々あふれまじりた少作やと我  
はよけのわも生かすの鶴鶴  
と我々の鳴や夜のとほると我

横海 桑種 乙光 全 川 旭 丘 権 塚 易 年 所 池 懸 山 桑 節

夜真曳 柴漬

細代守

梅初も生かすも生かすの鶴鶴  
吾々の鳴や夜のとほると我  
々あふれまじりた少作やと我  
はよけのわも生かすの鶴鶴  
と我々の鳴や夜のとほると我  
柴漬の朝と生かすの鶴鶴  
柴漬の朝と生かすの鶴鶴  
おの竹を夜申持を細代守  
と我々の鳴や夜のとほると我  
細代守も生かすも生かすの  
世の生かすも生かすの鶴鶴  
と我々の鳴や夜のとほると我

木公 乙光 一甫 本席 一具 竹弓 乐水 桑瓶 不流 多よ女

類題 十萬句集初編冬之部上終

類題 十萬句集初編冬之部中

洞海舎涼谷編

一具菴一具校合

十二月

山王や十一月孔秘古笛

多よ女

霜月

霜月や旭の夜の極長

茶枝

喜他

霜月や星の光の丸く

一南

霜月や極の竹の枝

万里

霜月よ曲里のつる

布席

霜月よ只傳のゆく

一橋

霜月や旭のう

碧浦

霜月や旭のう

新水

冬

冬

冬至

家自の将本老一油素  
心一奉所気如室の如専  
屋之有相素列の如式  
形の如一也屋の如専  
欠如言一平の如一  
井戸堀の堀一  
过一高の如仕好  
冥の如一也  
如の如一子  
禮の如一也

全  
也蓬  
桃鴉  
高喜  
凉谷  
全  
丸琴  
凉花  
素考  
大構  
布帯

霽  
十日

髪置  
袴着

髪置の如  
袴着の如  
袴着の如  
白の如  
白の如  
白の如  
子祭の如  
子燈心の如  
子祭の如

白  
白  
高喜  
布席  
白  
白  
一  
燈籠  
全  
川

貞見世  
中

里軒樂  
子祭  
子燈心  
子祭

吹草祭  
御講

天降る如く吹草祭の事見え  
友々めく旅や此講を渡せり  
黒崎や此講の木の梅の香

里神樂

後刻の梅とあまよふ里神樂  
笛吹の一人身打 神楽吹

鉾打

生漉を呑めけりて鉾打  
此屋を流し去りて鉾打

貞貝世

雪の志のうらみて家内鉾打  
赤松の待りて家内鉾打

新養

後通の其家の祝を鉾打  
雪やみせりて家の鉾打

邊置

雪の志のうらみて家内鉾打

今月

此世有てそく家内鉾打  
雪のやうな海のう鉾打  
赤松の待りて家内鉾打  
河内の子をぬくし鉾打  
鉾打の事あるも多し鉾打  
赤松の待りて家内鉾打  
鉾打の事あるも多し鉾打  
西の山に鉾打の事あり  
赤松の待りて家内鉾打  
人々の山に鉾打の事あり  
赤松の待りて家内鉾打

赤井  
横海

一  
赤

赤  
赤

赤  
赤

川  
長

不  
曲

易  
平

赤  
赤

赤  
赤

久  
藏

一  
具

松  
巢

松  
嶋

茅  
帆

赤  
平

赤  
司

赤  
女

友  
之

左  
無

寛  
王

月夜

頃や月や梢の掃の夢  
るる月のまき物能回の落る  
月夜をくさるる船の世う船  
山やや三つとつる井戸の結  
冬月の夜風の戸口まきけ  
夢の月の夜右掃やまき月  
みききの月よまきくまきの  
誤掃の過ぎ曲るやまきの月  
少食の末まきくまきの月  
まきまきん掃の夜やまきの月  
松風の月まきくまきの月

赤葉 蕉丘 棠二 涼谷 田兼 全 李 旭 全 旭 全 旭 全 旭

冬月

冬月の地よまきくまきの月  
人の海ぬ月よまきくまきの月  
雪入ぬ大砂束やまきの月  
清の方も掃の具やまきの月  
冬月の月一掃掃く掃の音  
まきまきくまきの月まきくまきの月  
まきの月出まきくまきの月  
まきの月掃のりくまきの月  
まきの月の掃まきくまきの月  
舟の掃まきくまきの月  
庭木の掃まきくまきの月

磁瓶 旗海 此洲 多よま 真秋 才居 涼谷 文海 山権 梨浦 白起

吾の月をみるる山を傳たり  
 松平 松とてあまやあまの月  
 尖のまに重り伏やあまのこ  
 遠影の心なくおぬあまのこ  
 月依る様ちしあまの月  
 谷道の曲りくやあまの月  
 吾の月成切く江よあまの月  
 物子末く末言送き世のあまの月  
 滝下の貸借もあまの月  
 吾の月海木よあまの月  
 山とれ楠ささあまの月

夕山  
 素白  
 戴屋  
 竹葉  
 一具  
 文光  
 名村  
 一南  
 五峯  
 全  
 大槩

木枯

若き交はれ海を遊ぬあまの月  
 風や月の影ぬあまの上  
 木枯のそよ風ちるあまの月  
 あまの月やゆらゆらあまの月  
 風と霞をわたりやあまの月  
 木枯よ有る風を枯枯あまの月  
 あまの月やあまの月あまの月  
 風や影をわたりやあまの月  
 木枯よ以てあまの月  
 月の一二を休むあまの月  
 木枯の以てあまの月

素如  
 雨行  
 楽水  
 李朗  
 文鬼  
 長彦  
 陶烟  
 量山  
 不流  
 古翠  
 粗年

木部

木部ノ此五段ノ乗又大乗也  
明々也木部ノ以と云うが  
風やふ降く落るる等の意  
木部や右ノ廣世ノ樹ノ出  
風や形體の消え盡の意  
身道く木部以や暮の工夫  
あゝゝ此以と云う言はれ  
木部や右ノ市ノ為人通  
風や形體の消え盡の意  
あゝゝや之抄の由首  
木部ノ此五段ノ乗又大乗也

乗氏  
今  
大費  
唐年  
一具  
文海  
碧浦  
南く  
薪水  
呂女

雪

冬

木部ノ此五段ノ乗又大乗也  
風や形體の消え盡の意  
木部や右ノ市ノ為人通  
風や形體の消え盡の意  
あゝゝ此以と云う言はれ  
木部や右ノ市ノ為人通  
風や形體の消え盡の意  
あゝゝや之抄の由首  
木部ノ此五段ノ乗又大乗也

素白  
古川  
竹林  
百死人  
松付  
吟鹿  
上七  
西布  
二丘  
出梅  
一蓋

物も生く飛く 空の霞  
あつもすく十日 空の霞  
杉の雪一棹 杉の雪  
枝もれん 杉の雪  
ふ使も杉の雪  
世察も杉の雪  
非代より 杉の雪  
作雪の戸 杉の雪  
杉の雪の 杉の雪  
生雪の 杉の雪  
杉の雪の 杉の雪

真  
雪井  
文光  
古  
古  
蘇我  
蕉丘  
二晶  
古壇

七  
は  
二  
著  
生  
予  
杉  
神  
降  
吸  
穢

不曲  
不  
能化  
忍  
古  
幕  
典  
全  
全  
大費

竹葉や 壽限もさきき雪の香  
月一風物もさきき雪の日の香  
花の香もさきき雪の日の香  
暮の香もさきき雪の日の香  
雪の香もさきき雪の日の香  
一日は世に於てや 雪の香  
大名を存するも 雪の香  
持たし子にさきき雪の香  
雪の香もさきき雪の日の香  
雪の香もさきき雪の日の香  
雪の香もさきき雪の日の香

全 杜年  
全 松竹  
一 雨  
自 岬  
下 寺  
史 子  
下 雪

秋の香もさきき雪の香  
雪の香もさきき雪の日の香  
雪の香もさきき雪の日の香  
雪の香もさきき雪の日の香  
雪の香もさきき雪の日の香  
雪の香もさきき雪の日の香  
雪の香もさきき雪の日の香  
雪の香もさきき雪の日の香  
雪の香もさきき雪の日の香  
雪の香もさきき雪の日の香

淡 高  
桐 雨  
栄 蔭  
全 葉  
全 花  
全 葉  
全 花  
全 葉  
全 花  
全 葉  
全 花  
全 葉  
全 花

竹の香撓し後うぬみり  
一時や六十好あ 香あふり  
香うけりや打切ぬ基子論と安  
手をゆいし香うくもく松の香  
香存やあぬ入る 於のうち  
香伴や上る平の神所下る  
より向し此懐月もほし香の屋根  
香ちるや庭よ小松ありま物  
持宿く芦折きく凡けさの香  
屋根の香うの種ぬぬ戸口  
湯の香えもゆぬ香の香あふ

香家  
文海  
高よ女  
等谷  
四明  
今  
碧浦  
抱琴  
お赤  
松巢  
壮其

うけんあくゆをほりや香の香  
又もゆが控香あや 香うくれ  
人初うり香の勢ぬ香の香  
香の屋根言の低のまけきみ  
四季の香色薫し香の香  
神の香消く松也戸口丸  
月香の香う手あまを降堀む  
障止く月香あま香の松  
一新の香屋さうく香の松  
秋の香送く人子あくく  
明日もあ初やう香屋山あふ

白起  
何年  
荷了  
耕雲女  
松橋  
松月  
呉洋  
芦直  
木架  
今  
桂秀



香之傳や家の人々の小菜畑  
 香之振ひくく一隅のあふもろり  
 香の日は二所の角の桜桐草  
 香斗一降跡一より新の香  
 香の日は香舞舞る言舎うち  
 香の香香香うけ新やゆ葉  
 香傳もも味次香の傳うち  
 香の香香く飛くく香まろり  
 脚觸も出は香をいゆる香香  
 香枝の並まもま新の香うち  
 白程ふもも香の香く香うち

宇香  
 知芝  
 月露  
 向直  
 五竹  
 一甫  
 一陽  
 乙香  
 五况  
 全  
 全

香之傳や家の人々の小菜畑  
 香之振ひくく一隅のあふもろり  
 香の日は二所の角の桜桐草  
 香斗一降跡一より新の香  
 香の日は香舞舞る言舎うち  
 香の香香香うけ新やゆ葉  
 香傳もも味次香の傳うち  
 香の香香く飛くく香まろり  
 脚觸も出は香をいゆる香香  
 香枝の並まもま新の香うち  
 白程ふもも香の香く香うち

東林  
 去く  
 香風人  
 香出  
 素出  
 昔谷  
 秋堂  
 前々  
 全  
 多々  
 全

何きく雪を懐くけまの香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香

多由女  
布席  
全  
應  
大梅  
田華  
全  
竹油  
双二  
未夷  
文鬼

雪吹

雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香  
雪舟の香を懐く雪舟の香

多由女  
布席  
全  
應  
大梅  
田華  
全  
竹油  
双二  
未夷  
文鬼



水

氷る氷や氷統の上を流の上  
 暖のうらあつもあま氷うけ  
 氷る氷や氷の谷の家  
 氷る氷や氷を氷る氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷

大梅  
 雲象  
 羽人  
 氷仙  
 全  
 氷  
 不依  
 萬  
 尺  
 吟  
 蕙

雪車

雪車

雪車

氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷  
 氷る氷や氷の氷

梅  
 雲  
 羽  
 氷  
 全  
 氷  
 不  
 萬  
 尺  
 吟  
 蕙

柱板をく実刺て形水う形  
扱えとる肉と物と女骨の先  
蓋けの房也膚の水う乳  
信と女児の身とく物と  
明女の面を二重と水うと  
吹きとる指子のと水うと  
第一目の信と物と女這入口  
四子との形と女と確のあり  
山風のるんう形と物と  
水うと乳とと湯屋の這入口  
高の又見とる他の水う形

文鬼  
一之  
夕山  
去子  
今  
左琴  
木公  
今高  
丈二  
尚古

鐘水  
氷柱

霰

る候と竹板水う且う形  
戸の氷の光る自和の  
物と是ぬととととととと  
持とるとととととととと  
ととととととととととと  
おとる玉と水の氷柱の光る  
物と玉けの氷柱ととととと  
涌と程掃ととととととと  
玉と扇とととととととと  
ととととととととととと  
一とととととととととと

一  
兼  
雅因  
双二  
熟菜  
瓶乙  
古  
水  
山  
岩



冬雨

と我もやうなよよの雪をよ  
妻もやうなよよの雪をよ  
る市のわけの雪をよ  
乃船のやうなよよの雪をよ  
帰味しよの雪をよ  
おこしよの雪をよ  
庭木をよの雪をよ  
飯所をよの雪をよ  
妻をよの雪をよ  
やうなよの雪をよ  
梅樹をよの雪をよ

一 雪  
才 石  
作 了  
乃 舟  
左 船  
松 常  
一 甫  
田 集  
左 陸  
右 集  
棟 へ

巨燧

物もよの雪をよ  
活毛の雪をよ  
加茂川も雪をよ  
心もよの雪をよ  
梅もよの雪をよ  
上もよの雪をよ  
掛もよの雪をよ  
梅光も雪をよ  
梅もよの雪をよ  
雪をよの雪をよ  
梅もよの雪をよ

多 女  
全  
又 藏  
梅 榮  
一 具  
小 園  
茶 新  
才 石  
一 飛  
双 二

冬

世よふ人かおほけな長焼  
物とまよふを思打たる長焼は  
ぬくくし旭をのきよあつうか  
松竹也長焼を囲ふる風  
舞合老の侍りや並生焼  
あつうくをまききる老母が  
長焼くぬく如棚のおんく  
病ふ人よ病物も出る長焼が  
病ふ人も病物も出る長焼が  
松竹也長焼の庭の岩の音  
世よふ人かおほけな長焼は

古陸  
松竹  
雲霞  
一之  
全  
芦帆  
玄子  
五  
全  
集  
あよ女

田畑裏

火鉢

埋火

表積一夏月之田畑裏の  
兄弟う横坐半おぬくか  
あまきりう金くさるおろまが  
出たりのおろまを解るを解る  
袂うく梅子を出ん中解るれ  
大生解る解る人のあつう  
解る物の重るを解るを解る  
解るの手を解るを解るを解る  
中解るを解るを解るを解る  
世女の横坐を解るを解る  
埋火を解るを解るを解る

あよ女  
横海  
迦弥  
雲梯  
キ  
磐浦  
夕山  
尖二  
二  
五  
不曲

嘉徳一夏月之田畑裏の

火鉢

兄やう横坐 半はおぼくは  
為まゝのうまをいしおろし

出たりのおまを成るを研

杖うう 柀子を出ん中研

大を研 水坐の人のあ

修物の重るは借るを研

孫の手を何々めてるを研

水向直子をせしを研

燕女の横身をを研

埋火をいりたるを研

横海

迦弥

雲珠

キ山

磐浦

夕山

火二

二丘

五况

不曲

埋火

埋中や散列する世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中を有る世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人

有水  
有機  
有湖  
有寺  
有天  
有斗  
有寸  
有全  
有高  
有宗

埋中や散列する世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中を有る世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人  
埋中の子を教ふる世捨人

有水  
有機  
有湖  
有寺  
有天  
有斗  
有寸  
有全  
有高  
有宗

有りて其を投出は炭や掃粉  
傳人のちと後ひはる掃粉  
糸をまきあふく出や掃粉  
掃粉をまきして掃粉向く  
石炭の掃粉も掃粉掃粉  
掃粉と掃粉も掃粉掃粉  
掃粉掃粉掃粉掃粉掃粉  
掃粉掃粉掃粉掃粉掃粉  
掃粉掃粉掃粉掃粉掃粉  
掃粉掃粉掃粉掃粉掃粉  
掃粉掃粉掃粉掃粉掃粉

掃粉  
何年  
一具  
何年  
甫  
友之  
寛  
五  
全  
素

炭

掃粉を掃粉しきよ掃粉  
掃粉の掃粉 子もまきの掃粉  
掃粉掃粉掃粉掃粉掃粉  
掃粉掃粉掃粉掃粉掃粉

掃粉  
二晶  
永  
全  
撞  
一具  
小圃  
子  
圃

川の端を傷を切り去る  
掘くして焚きさく乃ち炭の屑  
炭碎くて一箱の取戻り有  
うけさるも男世帯やちり炭  
炭屑ととも燻く女柿の種  
を種炭子燻と取りて坐敷か  
柄こく燻く炭の燻り際  
炭消へて焚の取戻り炭見出  
炭竈や老も平も燻くし  
炭竈又鬼を移出れ於炭か

植秀  
左野  
川長  
二晶  
禾木  
土を祀  
真路  
薪水  
一具  
一之  
廿月

### 炭竈

〇五八

### 炭燒

〇五八

### 炭俵

### 火桶

於凡や世一竈も手手炭  
背戸山や古炭も立るも燻  
燻くして炭もよるも燻か  
炭燒のたち切りも燻か  
炭中赤の手削白土本も燻か  
も燻焼の用へた炭の末屋か  
手も燻して燻くも燻か  
手燻や極の木も燻か  
杉新と赤又木や桐も燻  
張るも工夫の燻るも燻か  
燻くも燻くも燻るも燻か

杉  
涼谷  
無林  
赤水  
一水  
一蕙  
夕山  
多木  
芝  
芝  
芝

冬  
冬至梅  
冬梅

坐あらんまをさる梅也相中梅  
去一あま下坐すらん中梅也  
海生や及く廻凡相中梅  
推具の凡の手持ふ中梅也  
手あまの老南昔も中梅也  
あくとるまの中梅一ツも中梅也  
梅の素心くめくめく中梅  
梅ももまぬ見たりも中梅  
冬の中梅おろくくも中梅  
中梅ももまぬ見たりも中梅

一 具  
菓  
熟  
荷  
杏  
了  
四  
十  
風  
水  
梅  
山

冬の中梅一ツも中梅也  
梅ももまぬ見たりも中梅  
入おの梅も中梅也  
赤中梅も中梅也  
新中梅も中梅也  
梅の中梅も中梅也  
梅の中梅も中梅也  
梅の中梅も中梅也  
梅の中梅も中梅也  
梅の中梅も中梅也  
梅の中梅も中梅也

秋  
芭  
白  
丁  
芋  
鎌  
文  
大  
唯  
梅  
山

水仙

傍さう二日託夢さうしきの梅  
雲の月も影の心來ぬ梅の心  
瓦さく跡さうしきさる水仙心  
水仙の心も影もさるさるさる  
夢さうしき土月さる水仙花  
水仙や画さるしきさるさる  
水仙の月さるしきさるさる  
水仙の心さるしきさるさる  
水仙の影さるしきさるさる  
水仙の心さるしきさるさる  
水仙の影さるしきさるさる

一具  
夢村  
三松  
茶井  
意左  
夢右  
不曲  
巢乎  
雨明  
万里

水仙

水仙の心さるしきさるさる  
水仙の影さるしきさるさる  
水仙の心さるしきさるさる  
水仙の影さるしきさるさる  
水仙の心さるしきさるさる  
水仙の影さるしきさるさる  
水仙の心さるしきさるさる  
水仙の影さるしきさるさる  
水仙の心さるしきさるさる  
水仙の影さるしきさるさる  
水仙の心さるしきさるさる  
水仙の影さるしきさるさる

多よ  
氷谷  
足茶  
全  
葉氏  
下宮  
多よ女  
葉氏  
多よ女  
文来

冬

〇空

冬牡丹

冬牡丹は花未移し一葉も生  
冬牡丹は花未移し一葉も生  
冬牡丹は花未移し一葉も生  
冬牡丹は花未移し一葉も生  
冬牡丹は花未移し一葉も生  
冬牡丹は花未移し一葉も生  
冬牡丹は花未移し一葉も生  
冬牡丹は花未移し一葉も生  
冬牡丹は花未移し一葉も生  
冬牡丹は花未移し一葉も生

植芽母  
冬牡丹  
冬牡丹  
冬牡丹  
冬牡丹  
冬牡丹  
冬牡丹  
冬牡丹  
冬牡丹  
冬牡丹

葱

大少もよく人々を牡丹  
大少もよく人々を牡丹  
大少もよく人々を牡丹  
大少もよく人々を牡丹  
大少もよく人々を牡丹  
大少もよく人々を牡丹  
大少もよく人々を牡丹  
大少もよく人々を牡丹  
大少もよく人々を牡丹  
大少もよく人々を牡丹

古葉  
西芽  
植海  
松常  
陶烟  
冬牡丹  
秋葉  
一南  
植海  
松常  
其及

根深

生姜掘

暖鳥

暖鳥は花未移し一葉も生  
暖鳥は花未移し一葉も生  
暖鳥は花未移し一葉も生  
暖鳥は花未移し一葉も生  
暖鳥は花未移し一葉も生  
暖鳥は花未移し一葉も生  
暖鳥は花未移し一葉も生  
暖鳥は花未移し一葉も生  
暖鳥は花未移し一葉も生  
暖鳥は花未移し一葉も生

其及

鷹

鷹狩

鷹野

冬鳥

ゆきたれしうりつるは 暖鳥  
ゆきつるは 暖鳥

おとすすくは 暖鳥

ゆきたれしうりつるは 暖鳥

玉和久

應く

世傳

文鬼

稲鳥

涼海

葉如

五况

桂葉女

芦帆

涼谷

玉子酒

納豆

玉子酒

今

柳樹

素如

水氷

松秀

方在

節之

極美

味友

素来

冬

橋も後子出さるく納豆が

素白

砂付く、あられもあられ来一杷

氷乳

娘のしほ堂をさうる云物

後及

今

石河舟を吹出さる女許さる

真直

木よりけり一坂通れり

今

あやれをさる女ぬけり

吐き

類題十萬句集初編久之部中終

類題十萬句集初編冬之部下

洞海舎凉谷編

一具菴一具校合

極月  
師走

極月や一宿のあも季うさ

三柳

あられをさる女と来河をさ

文光

海原も師をさる早や日の影

高堂

禱もさる梅あやう花河をさ

大貴

人並に師をさる市を過り花

命女

とら、あられをさる女と来河をさ

新島

赤裳ゆき師をさる梅をさる

行九

冬

臘八 衣肥 事納 茶喰

月よりおれは月より南風は西より  
強弱吹く十有立休を以  
て此荒を予より予を以て  
織より織を予より予を以て  
刻舟の理快のなる所を以て  
織ハヤ三尺積る層の重  
織ハヤ五尺積る層の重  
衣肥物より予より予を以て  
衣肥 衣肥の羽を以て後世の  
養生衣 梅よは予より予を以て  
梅を以て予より予を以て

芝葉 芦帆 五岬 裁星 宇島 戸山 多喜 松崎 多喜 梅山

佛名會 寒入

佛名會の事をも亦や某の  
某の事をも亦や某の  
々々切々々々々々々々々々  
一人は勇々々々々々々々々  
仙名や隣々々々々々々々々  
寒の入りも亦や某の  
是れは佛名會の事をも亦や  
始入の佛名會の事をも亦や  
寒の入りも亦や某の  
寒の入りも亦や某の  
寒の入りも亦や某の  
寒の入りも亦や某の

単年 積翠 若葎 右拳 雨考 一甫 名村 五岬 一甫 若葉

寒雨

春の傳もやまゝりて冬の内  
意せぬぬ春風乃や冬の内  
ちや春の意なきはなや冬の内  
田畑の出りし種ぬえりの雨  
雲の来りや春日此月の出るまで  
雲の月や望みよあつて松の乳  
雲の月の出せぬやも松つて  
雲の月も動くやぬ月の光が  
雲の月の福の種や市の林  
雲の月の惜しむぬ松のたけり  
雲の月の枝のたけり

梅海 鐘田 多よ女 雨竹 如旭 葛松 摸海 雨明 ちうま 葉梅

寒声



寒念佛

春の傳もやまゝりて冬の内  
意せぬぬ春風乃や冬の内  
ちや春の意なきはなや冬の内  
田畑の出りし種ぬえりの雨  
雲の来りや春日此月の出るまで  
雲の月や望みよあつて松の乳  
雲の月の出せぬやも松つて  
雲の月も動くやぬ月の光が  
雲の月の福の種や市の林  
雲の月の惜しむぬ松のたけり  
雲の月の枝のたけり

桂島 涼谷 子路 文海 蓬亭 一竹 一陽 龍化 十泉 松秀 雪井



蒲團

丸

足袋

頭巾

清由子侍とて残存を送るる色

字のたねとて残存の座する残存の

松苗くうけとて予するあすの

日のたねとて予する二能うそ

残存あるとする有のやとんか

先づと計のゆけ出るとんか

足袋存とて残存上連歌よけきり

予一ひの足袋存とて世話く足連山

侍も足袋存とて予下結の上

隣とて予とて侍とて残存の

何れとて又取とて予とて残存の

と角女  
一甫

一水

二水

二水

二水

二水

二水

二水

二水

二水

二水

古の程は昔の物とて残存の

うろたふ侍の足袋を譽る残存の

指の巻とて予とて予とて残存の

指の巻とて予とて予とて残存の

指の巻とて予とて予とて残存の

指の巻とて予とて予とて残存の

指の巻とて予とて予とて残存の

指の巻とて予とて予とて残存の

指の巻とて予とて予とて残存の

指の巻とて予とて予とて残存の

指の巻とて予とて予とて残存の

羽人

二晶

湯婆

乃

駁

駝

寒菊

寒梅

何くもや表裏待たぬ、数  
 あらうの上を子種子喰せ急  
 針の夢や折れた風の揺り電  
 揺の子の垂垂とある月秋の  
 空にたや空にぬ秋の空 空  
 空の葉子落中向くや明く處  
 空のくの枝は几程の白ひび  
 空の葉や相代を四つめ函志  
 空の梅や四の解はる春の秋  
 空の梅や合くくんとは春さる  
 空の梅や慈さるとははる川

茅丸  
 五况  
 植秀  
 市席  
 雨明  
 文光  
 乗三  
 大梅  
 吟處  
 杜世

冬椿

冬山

冬融

冬梅や花の枝は春梅着  
 冬梅や雪の道中 交柳合  
 冬梅一いつあつた小一 自  
 咲初より忘るる冬梅をき  
 冬梅花の平て六偏ぬ重  
 冬梅花の雪の道中 交柳合  
 冬梅花の雪の道中 交柳合  
 冬梅花の雪の道中 交柳合  
 冬梅花の雪の道中 交柳合  
 冬梅花の雪の道中 交柳合

九琴  
 萬之  
 兀号  
 川也  
 了身  
 斗延  
 了傳之  
 涼谷  
 御舟  
 其笑  
 臨事女



煤掃

昔者人の所尚りたる煤の世  
昔者人の所尚りたる煤の世  
昔者人の所尚りたる煤の世  
昔者人の所尚りたる煤の世  
昔者人の所尚りたる煤の世  
昔者人の所尚りたる煤の世  
昔者人の所尚りたる煤の世  
昔者人の所尚りたる煤の世  
昔者人の所尚りたる煤の世  
昔者人の所尚りたる煤の世

多喜 布席 史 古陸 里月 月家 回集 甫山 左来 旭丘 松秀

煤掃

とて掃や何ぞ新柳く東山  
煤を掃や何ぞ新柳く東山  
煤を掃や何ぞ新柳く東山  
煤を掃や何ぞ新柳く東山  
煤を掃や何ぞ新柳く東山  
煤を掃や何ぞ新柳く東山  
煤を掃や何ぞ新柳く東山  
煤を掃や何ぞ新柳く東山  
煤を掃や何ぞ新柳く東山  
煤を掃や何ぞ新柳く東山

柳掃 大葉 ぬふ 苜谷 抱琴 素石 一竹 全 五 一 甫 写麻人

冬

餅搗

搗手を運ぶやす舟  
為所の槌を以て殊を以  
殊掃の中を以て木賃を  
餅搗は此の如く周廻す  
海も自ら旋る餅を  
餅は此の如く男  
そは搗手私を以て田舎  
餅つきは此の如く  
林を以て此の運ぶ餅の電  
餅は此の如く餅の音  
大勢の如くの中へ餅の音

考宣  
棋海  
素朴  
四筆  
永界  
斗筵  
周燕  
愚山  
菊海  
五氏  
白起

歳暮

曆賣  
古曆

於賣  
節分  
豆打

餅搗は一日を以て  
餅は此の如く先を以て  
そは搗手は此の如く  
行邊を以て此の如く  
来るといふ此の如く  
曆を以て此の如く  
来るといふ此の如く  
於賣は此の如く  
節分は此の如く  
豆打は此の如く

松秀  
正令  
節之  
高古  
五岬  
一具  
雄嶺  
高古  
一光  
五岬

冬

古市

舟花より舟花や向河津

古市

舟花より舟花や向河津

古市

年用意

舟花より舟花や向河津

古市

年木樵

舟花より舟花や向河津

古市

年未

舟花より舟花や向河津

古市

冬

年尾

年の尾やふ二は所りし年の電  
積上し積もり積借る積

積債  
一南

行年

行とや札子傳る初終り文  
行とや古さうり札墨田川  
ゆく年の日みぬそりぬ壁の字  
行とややう稀ぬきのちし積  
行年やま子初るる年の書  
初とし札市や何苦不市の林  
行とやま森をそり果報の  
無利しそありそりまの書

一具  
一具  
一具  
一具  
一具  
一具  
一具  
一具  
一具  
一具

年宵

年宵

惜年

法をる子像のあやと一和  
日就高し積積くやまり世年  
親二人持を初とし惜るる年  
梅子もや過るまをり札名所が  
五三子娘しととし初ある年  
死く心とそありの初よ年の初  
家年ももろとと初ある年  
里人の菰手あしやとりの書  
集あしとる年の初や年の書  
手もまや梅先者も積もる年  
積もる年の初とと初ある年の書

年暮

年暮

一和  
一和  
一和  
一和  
一和  
一和  
一和  
一和  
一和  
一和

年暮

一和  
一和  
一和  
一和  
一和  
一和  
一和  
一和  
一和  
一和

大晦日

嬉人の橋上りや 大晦日  
傳のふら陸のや 大晦日

廣るぬふ終とまゝ 大晦日

大仙の身もも入 大晦日

軍うけき居き 大晦日

橋あつく陸の白い 大晦日

人うけあし以頼り 大晦日

傳のあま空と 大晦日

掛えよ軍 大晦日

うけきよ 大晦日

居る 大晦日

素戔

大居

元号

吉陸

素志

南石

大貫

一南

五

五

除夜

厄拂

掛取

岡見

春隣

春待

春近

年内立春

冬題不知

傳の松美を傳 春隣

待美のふぬれ 春待

人並よ美あつ 春待

ちる待や一樹 春待

人のそや月 春近

善きつ来て 春近

雛子鳴や 春近

鶯〜 春近

えいも 春近

新 春近

川丈

橋海

松常

玄く

如蓬

五竹

素志

碓嶺

柳鳩

竹如

寒川

冬鳥の眼さうしもうとく樹火打  
正月の暮るもむかし昆布あう  
暮る子躰く草や老る冬  
山姥をかつたもあとのちうさ  
松木の影を枯るは花さう  
葉木の影を枯るは花さう  
秋鳥の影を枯るは花さう  
枝ありを元まき実や餅ま  
田舎の影を枯るは花さう  
鳴鴨の影を枯るは花さう  
水鳥の影を枯るは花さう

冬鳥 正月 暮る 子躰 草 老る 冬  
山姥 かつた もあとの ちうさ  
松木 影 枯る 花さう  
葉木 影 枯る 花さう  
秋鳥 影 枯る 花さう  
枝あり 元まき 実や餅ま  
田舎 影 枯る 花さう  
鳴鴨 影 枯る 花さう  
水鳥 影 枯る 花さう

枯草の影を枯るは花さう  
こよや人 暮る 木のまき 餅ま

冬鳥 正月 暮る 子躰 草 老る 冬

小春の影を枯るは花さう  
石臼の影を枯るは花さう  
人考の影を枯るは花さう  
引ぬの影を枯るは花さう  
松の影を枯るは花さう  
米穂の影を枯るは花さう  
雪掃の影を枯るは花さう  
水鳥の影を枯るは花さう

小春 石臼 人考 引ぬ 松 米穂 雪掃 水鳥

持も荒んば枯く芒や荆の中  
厩うらあきくひの稚子や雪をり

其水  
去

儀梳も掛さぬ菴や樹を雪

全

室の又まをし志を焚火松葉が

全

川上の星くく河をり鴨の亭

全

山里も保の乳まき一を乳

乙

志くまや清の破風は乳尚る

文

江の上の弓張月や鴨の亭

華

白鞘の刀まきこく一老のこ

全

中の上と椽元より小春乳

美

赤板多るを雪の中やゆか

石

あふ乳とまきこく日照山路が

全

まき掃くを乳飯あひの仕り乳

石

惜む乳熟葉おろし味也大海日

全

雪雪のこまきこくまきこく小春日

志

降よりの雪ゆるあき乳くくか

全

程くあき乳乳まきこく乳の夏

全

雪ゆらぐく葉硫の石や露を氷

其

雪ゆらぐく雪の雪や板 鹿

全

ふふん一通ふ前や櫓ゆら

去

田の畔の雪まきく掃く新せと

全

まき荒の雪板をまきく小春日

葉

海にふゆをたきや雪の乳  
 今  
 山人の子乳素足のゆきや素柱  
 今  
 山雀の来魚只今くく雪の雪  
 乙  
 引舟の横にそそりたる乳の乳  
 今  
 風や海のうくゆく陸の香  
 今  
 雪のうと眼よるゆき物皆まじ  
 柏  
 大の子乳素より科や素の乳  
 其  
 右のり乳のゆきゆくゆく枝の雪  
 出羽  
 素江  
 右のり乳のゆきゆくゆく枝の雪  
 全

類題十萬句集初編冬之部下終

江戸本石町十軒店萬笈堂英大助藏版俳書目録

○類題之部

俳諧發句五百題 春秋庵白雄房撰 小本二冊

同 新五百題 田喜庵護物撰 中本二冊

同 新々五百題 全撰 全二冊

同 名所千題集 全撰 全三冊

同 今人東風流 洞海舎涼谷撰 具庵一具校 全二冊

同 十萬句集 全撰 全四冊

同 故人五百題 松雪庵撰 小本一冊

同 續故人五百題 具庵一具撰 全一冊

同 類聚 八采園家松撰

中本二册

同 今人五百題 八雲東溟編  
涉壁千格校

小本二册

此書一人五万五千餘字... 余始を爲る當時は一睡ふり...

同 類題 燕庵唐守撰

中本二册

同 古今撰 燕庵唐守撰

全一册

同 新類題 六合庵方理撰

全二册

同 萬題集 不題砂子  
八雲東溟撰

全四册

世に古集あり... 幾万題を括せ在世人... 凡浦家より... 仁比多尾唯嶺撰

同 快叢集 仁比多尾唯嶺撰

小本四册

俳諧田毎の目 桃隣天人編

全一册

同 言苗集 錦舎素柳編  
笠柄素行校

横本二册

今人發句集 禾木園校輯

全一册

四季發句帳 州丸大人編

全一册

白話七五三

○假名遣物

万葉用字格 春登上人撰

全一册

對照假字格 長野美波田大人撰

全一册

音便假字格 春登上人撰

全一册

○句集之部

嵐雪句集

稱玄峰集

全一冊

其角句集

攻高久成集

全一冊

葵太句集

全一冊

吏登句集

全一冊

巢兆句集

全二冊

完來發句集

全二冊

梅翁宗因發句集

太無發句集

存義發句集

獅子賦發句集

柳居發句集

棋狀瓶

甲斐州九集

葛里句集

遠句集

護物七部集

乙二七部集

饒舌錄

元木綱大人書

三吟未來記

俳諧寐志

春秋庵白痴

今七部集

冬至庵庚年撰

今人附台集

永木園校註

全一冊

全一冊

全二冊

全二冊

全二冊

全一冊

全二冊

全一冊

全四冊

芳草集

田喜庵

全一册

芦の

○季寄之部

戀の景 葦雪庵北元著

俳諧手挑灯

一名俳諧

小本二册  
中本二册

同 掌中

俳諧袖鏡

全一册  
寸珍一册

季寄便覽

校搨

俳諧通言

横本一册

小本一册

○文之部

新編俳諧文集

あつたての  
文をひら

全一册

俳諧變態一覽

両面一校搨

袖定規 表俳諧定坐変体之圖

七歌集々の存古哲傳の變化の  
了正風俗の自主を一目に  
了るべし

俳諧礎

○掌中寸珍物

此物  
集州

掌中五百題初編

集州初編

同 編

集州三編

同 芭蕉發句集 編

同 其角發句集初編 二編

同 嶺雪發句集初編 二編

同 乙由發句集 二編

同 蓼太發句集初編 二編

集卅三編

集卅四編

集卅五編

集卅六編

集卅七編

集卅八編

集卅九編

集卅十編

集卅十一編

集卅十二編

同 前五百題初編

同 編

同 二編

同 古今撰

猶追之出刺

集卅一編

集卅二編

集卅三編

集卅四編

俳諧一葉集

同 薄用集

續今人...

掌中...

前編五冊

後編四冊

全二冊

全本全冊

近世俳諧十家類題集 過日庵祖郷輯 全一冊

名家類題集 同 著 全一冊

續粘尾花集 八哀庵碑領著 全二冊

類題發表集 雜之部 同 著 全二冊

諸國名家集 安房之部 諸國追々出版 寸珍本 全四冊

古今五百題 全二冊

俳諧獨警占 全二冊

俳諧道の便 全二冊

俳諧戀の禁 全二冊

6294  
30.3.14

三都

發行

書林

京都三条通掛屋町 大坂心齋橋北久太郎 同 安堂寺町 同 博勞町 同 河内 同 江戶芝神前 同 日本橋通 同 小 同 山 同 通 同 須原町 同 須原町 同 本石町十軒店 同 下谷柳成道

文次郎 喜兵衛 太右衛門 茂兵衛 嘉七 新兵衛 佐兵衛 茂兵衛 伊大 助板

